

[研究論文]

砂糖とコンテンポラリーアート

大谷友花

Sugar and Contemporary Art

Yukaotani

This study focuses on the socio-cultural significance of sugar as a medium of expression within the realm of contemporary art. It engages in a meticulous analysis of the intricate backdrop of sugar production and distribution, employing specific instances of artistic creations as illustrative examples.

Driven by the parallels between molten glass and molten sugar, the author has crafted numerous artworks combining glass-making methodologies and sugar-crafting techniques. Subsequently, following an immersive engagement in an artist-in-residence program in Taiwan, an investigation of the historical context of the Japanese colonial era in Taiwan and the concomitant narrative of the sugar industry ensued. Taiwan notably repurposed several defunct sugar factories into cultural and artistic hubs, sparking urban and regional development through creative initiatives. This inquiry thus delves into this paradigm of revitalization while concurrently examining the symbiotic relationship between the sugar industry and the contemporary art scene in Taiwan.

The fundamental aim of this study resides in garnering insights into the historical and cultural dimensions of sugar, channeling the perspective of an art practitioner. Furthermore, it seeks to deconstruct the social implications and interpretive messages encapsulated within artistic representations employing sugar as a central motif. In doing so, particular emphasis is placed on dissecting the interplay between Taiwan's sugar industry and creative communities. Furthermore, the research introduces the author's artistic practice, thereby unfurling avenues for the exploration of innovative prospects within the realm of artistic expression through the medium of sugar.

はじめに

砂糖は可塑性が非常に高い素材である。溶かして飴状にする
と型に流し込んで成形したり、粘土のように成形したり、吹き
ガラスのように空気を吹き込んで中空のオブジェを作ること
もできる。また、粉砂糖を使ったシュガーペーストは粘土のよ
うな質感を持ち、繊細な造形が可能である。このような特性から、
砂糖を用いた芸術表現は食にまつわる分野だけでなく、コンテ
ンポラリーアート（現代美術）の素材およびテーマとしても使
われている。筆者はアメリカでガラス芸術と現代美術を学んで
いた頃、吹きガラスの練習をしているときに溶けたガラスと飴
の様子が似ていることに興味を持った。以後、ガラス制作の技
法を飴の成型に応用して作った器「Sweet Vessels」シリーズ
(図①)をはじめ、現在に至るまで砂糖や飴を素材とした作品
を数多く制作してきた。また、台湾における糖業の歴史につ
いて知ることは自身の作品制作においても大きな影響をもたら
した。



図① yukaotani, 《Sweet Vessels》2013.

2015年に台湾・高雄にある元製糖工場の一部を活用した文化施設「橋仔頭糖廠藝術村」より招聘を受け、約2カ月にわたる滞在制作を行ったことをきっかけに、台湾がかつて日本の植民地統治下にあり、日本政府の国策によりサトウキビを大量に生産していたことについて多くを学んだ。廃業した製糖工場内には糖業史の博物館があり、台湾糖業の歴史の移り変わりを学ぶことができた。また、巨大な圧搾機や結晶タンクなど当時使用されていた機器もそのまま残されていた。高雄では現在も小

規模なサトウキビの生産が続いているため、畑でサトウキビが成長している様子や、伝統市場でサトウキビやそのジュースを販売している様子を見学する機会もあった。私たちが普段口にする砂糖にはさまざまな歴史と文化的背景があり、砂糖について考えるということは現在の社会がどのような成り立ちで生まれたのか、ひいては今後のさらなるグローバル化社会のあり方について考えることにもつながるのを実感した。

このような経緯から、筆者は現代美術の実践者としての視点から砂糖とアートについて紐解き、現在滞在している台湾での糖業と芸術との関わり合いと、自身の作品制作の実践をも含めた研究として発表したいと思いついた次第である。具体的な方法としては、以下の3つの項目に分けて考察する。これらの方法を用いた研究の主な目的は、アートという表現媒体を接点とした砂糖の歴史と文化について過去から現在までをとおして見つけ、砂糖とアートの間にどのような相互作用が起こりうるかという問題について検証することである。

1. 砂糖の持つ歴史・文化的背景と現代美術作品についての考察：

砂糖の世界史をふりかえり、世界各地のアーティストによる砂糖を素材やテーマとして用いた現代美術作品を例にとり、それぞれの作品にどのようなメッセージが込められているのかを分析する。

2. 2000年以降の台湾におけるクリエイティブな製糖工場活用法：

台湾では現在、使われなくなった砂糖工場や関連施設を芸術文化施設として再利用する動きが進んでおり、その中でも特にアーティストの作品創作や発表を積極的に支援している施設について、その取り組みを調べる。

3. 砂糖をテーマとしたアート制作の実践と実験：

筆者による砂糖をテーマとしたアート作品制作の過程を紹介し、砂糖を使った芸術表現の新たな可能性について探索する。

1. 砂糖の持つ歴史・文化的背景と現代美術作品についての考察

"Strange that an article like sugar, so sweet and necessary to human existence, should have occasioned such crimes and bloodshed!"

—Eric Williams, Capitalism & Slavery⁽¹⁾

1.1 砂糖と政治・経済・権力

砂糖と現代美術の関係を探るには、まず砂糖生産にまつわる歴史背景を避けて通ることはできない。砂糖の原料は主に熱帯で育つサトウキビと寒冷地帯で育つ甜菜（ビート）だが、ここでは最も古くから栽培されていたサトウキビの歴史と文化背景に主な焦点を絞り、それらに起因する社会問題を反映する現代美術作品について検証する。

サトウキビから砂糖を作る製法は紀元前500–350年ごろにインド北部で体系化されたと考えられている⁽²⁾。砂糖とその精製技術はその後バルシアやアラブ諸国、エジプトなどを経て世界中に広まった。中世以前の世界において砂糖は高級な薬や香辛料として扱われ、王侯貴族など一部の特権階級だけが享受できるものであった。16世紀頃より大航海時代を経てヨーロッパ諸国が新大陸に到達し、それらの土地に次々と植民地を築くようになる⁽³⁾と砂糖の生産貿易量は飛躍的に増えた。サトウキビはイネ科の暖かい気候を好む植物で十分な日照と水が必要だが、ブラジルやカリブ海沿岸などの地域はサトウキビの生育条件を満たしており、大規模な農園（プランテーション）（図②）でのサトウキビ栽培が盛んに行われるようになった。しかしこれらの農園での労働を担っていたのは、大部分がスペイン、ポルトガル、オランダやイギリスなど西欧諸国の奴隷貿易によりアフリカ大陸から連れてこられた奴隷であった。サトウキビ農園や製糖工場での労働環境は非常に過酷であり、この時代のサトウキビを原料とした砂糖の生産労働力は多くの地域において人身売買システムと強制労働という多くの犠牲によって成り立っており、奴隷制度が廃止になった後もその影響は人種差別をはじめさまざまな形で現在にも深刻な社会問題を残している⁽⁴⁾。

サトウキビは換金性の高い作物であったため、砂糖の生産と流通は激しい争いを引き起こし、階級制社会、奴隷制度、アフリ



図② Theodore Bray, "19th Century Colored Lithograph Depicting a Sugarcane Plantation." Tropenmuseum, part of the National Museum of World Cultures. CC BY-SA 3.0, Wikimedia Commons. <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=7771636>.

リカ民族の離散、モノカルチャー（特定の生産品にだけ依存する経済構造）による植民地と宗主国の間の貧富の差の拡大が生じた⁽⁵⁾。このような歴史背景を反映して、現代美術シーンにおいても砂糖と権威主義、人権など複雑な問題についてのメッセージを含んだ作品が登場している。

1.2 砂糖をテーマとしたコンテンポラリーアート

ここでは砂糖を通じてさまざまな社会問題を提起する作品を発表している現代美術作家を例にとり、個々の作品についてその作品の持つメッセージを分析する。具体的には次の6名の作家と当該作品について論じる。

- ①カラ・ウォーカー 《A Subtlety》
- ②ヴィック・ムニーズ 《Sugar Children》
- ③メシャク・ガバ 《Sweetness》
- ④ターシャ・マークス 《Alabaster Ruins》
- ⑤羅懿君 《蔗渣，糖蜜，混合酒精，是什麼使今日的蔗園變得如此不同，如此有魅力？》
- ⑥アンドレア・ジャンデルノア 《Unsettled》 および 《Pulled》

上記の作品のうち①②③は新大陸における西欧諸国の植民地支配と黒人奴隷の問題、①④は砂糖の彫刻と階級制社会および権威主義の関係、⑤には日本による台湾の植民地支配と戦争、⑥は現代の消費社会と慢性疾患、アイデンティティの問題といったメッセージを含んでいると筆者は分析する。

①カラ・ウォーカー

アメリカの美術作家カラ・ウォーカー（Kara Walker, 1969-以下ウォーカーと称する）は人種問題・ジェンダー・セクシュアリティなどをテーマとした作品で知られているが、中でも2014年にブルックリンにある旧砂糖工場の建物で展示された、巨大な砂糖の芸術作品はそのスケール・内容においても社会に大きなインパクトをもたらした。《“A Subtlety or The Marvelous Sugar Baby”, (副題：ドミノ製糖工場の解体に際し、無給で酷使され、サトウキビ畑から新世界のキッチンまで甘い味覚を精製してきた職人たちへのオマージュ)》（以下《A Subtlety》と称する⁽⁶⁾）と題したこの作品（図3）は、幅23m、高さ10m程の巨大なスフィンクス像と、それを囲むように黒人の児童労働者をかたどった立像が点在するインスタレーションであり、作品全体で35トンもの砂糖が使用されている。中心的な作品である純白のスフィンクス像は、ポリスチレンの土台に精製した白砂糖がコーティングされている。この像は「マミー」と呼ばれるかつてアメリカで白人家庭に仕えた黒人家政婦の典型的な容姿をしており、裸でお尻を突き出した挑発的なポーズで四つんばいに鎮座している。作品タイトル中の“subtlety”は中世

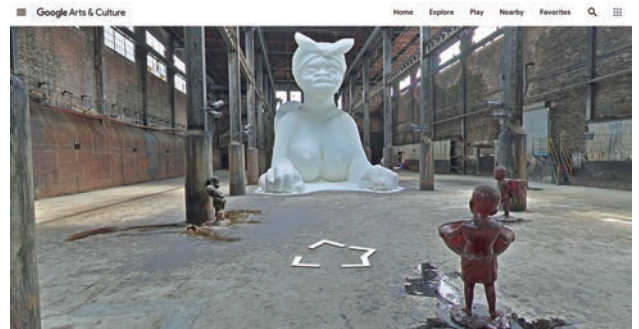


図3 Kara Walker, 《A Subtlety》2014. Google Arts and Culture によるアーカイブ（スクリーンショット）<https://artsandculture.google.com/entity/kara-walker/m04zfgb>

において王族の宴会のため用意された精巧な砂糖彫刻を意味し、これらの彫刻は王侯貴族の富と権力の象徴であったといわれる⁽⁷⁾。ウォーカーはこの言葉を聞いたときに強烈なインスピレーションを受けたという⁽⁸⁾。

黒人の児童労働者の立像は純白のスフィンクス像と対照的な黒褐色をしており、モラセス（砂糖を精製する際の副産物である糖蜜）でコーティングされている。《A Subtlety》はニューヨークに拠点を持つアートNPO団体、CreativeTimeのコミッションにより実現し、約2カ月の展示期間中無料で一般に公開された。展示の会場となったドミノ製糖工場（Domino Sugar Refinery）（図4）は19世紀後半に創業し、2004年に閉鎖された後は廃墟となっていた。建物の大部分はウォーカーの展示終了後間もなく解体され、再開された跡地は高級アパートメントと公園として生まれ変わった。一方、作品はGoogle Arts and Cultureにより会場の360°ビューがインターネットにアーカイブとして保存公開されている⁽⁹⁾。

②ヴィック・ムニーズ

ブラジル出身の美術作家ヴィック・ムニーズ（Vik Muniz, 1961-以下ムニーズと称する）は日常にある身近な素材を使い、



図4 Domino Sugar Refinery, 2012年頃の外観 Photograph by Idamantium, CC BY-SA 3.0. <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=23270700>.



図⑤ Vik Muniz, 《Valentina, the Fastest》1996, gelatin silver print, sheet: 14×11 in. (35.6×27.9 cm.), Smithsonian American Art Museum, Museum purchase made possible by the Horace W. Goldsmith Foundation, 1998. 31. 5. <https://americanart.si.edu/artwork/valentina-fastest-36332>

歴史的な報道写真や有名な絵画を再現した写真作品を多く制作している。作品《Sugar Children》シリーズのひとつ、《Valentina, the Fastest》(1996年) (図⑤) は砂糖の産地と、その主なる労働者たちの物語を題材にしている。ムニーズはカリブ諸島のセントクリストファーネイビスを訪れた際に、現地のサトウキビプランテーションで働く親・祖父母を持つ子供たちに出会った。ムニーズは彼らと親しくなり、ポートレートをボラロイド写真で撮った。さらにイメージを黒い紙にまいた白砂糖で再現し、それを写真シリーズとして発表した⁽¹⁰⁾。無邪気に幸せそうな笑顔を浮かべる子供たちの表情の柔らかさと同時に、彼らの祖先が体験してきたであろう製糖業をめぐる過酷な労働とのアイロニーを暗示しているかのように見える。

③メシャク・ガバ

ベナン出身のメシャク・ガバ (Meschac Gaba, 1961- 以下ガバと称する) はアフリカとヨーロッパを拠点に活動している美術作家で、経済、貿易、貨幣などを主題とした社会的メッセージを含む作品で知られている。作品《Sweetness》(2006年) (図⑥) は第27回サンパウロ・ビエンナーレのために制作した建築模型状の作品である。作品を構成するのは世界各地のさまざまなランドマーク的な建物のミニチュアであり、それらは白い精製糖でできている。建物はガバが以前滞在制作を行ったブラジル・レシフェの市街図をベースにして配置されている。ブラジルの北西部に位置する港町レシフェは砂糖産業中心地として繁栄したオランダに隣接し、ポルトガル王室から奴隷貿易の受入れ港としての特権を与えられ、奴隷貿易の中心地として発展した⁽¹¹⁾。

中世から近代におけるグローバル化の発端は欧州諸国がアフリカから砂糖生産に従事させるために大勢の奴隷を船に乗せて



図⑥ Meschac Gaba, 《Sweetness》2006, Installation view at UCCA Beijing, Image courtesy of UCCA Center for Contemporary Art, <https://ucca.org.cn/en/exhibition/meschac-gaba-sweetness/>.

運んできたという歴史に大きく起因している⁽¹²⁾。このため黒人が新大陸をはじめヨーロッパ諸国の植民地となった土地に強制的に離散させられ、それぞれの地に根付いていくことになった。ガバの作り出した白い無機質な架空の都市模型は、黒人奴隷貿易の歴史と奴隷の離散が引き起こしたグローバル化の過程を凝縮した作品だといえる。

④ターシャ・マークス

ターシャ・マークス (Tasha Marks, 1988- 以下マークスと称する) はイギリスのアーティスト・食歴史家であり、彼女が主宰する AVM Curiosities は食物や香りを用いた知覚に訴えかける作品を特徴としている。《Alabaster Ruins》(2017年) (図⑦) はロンドンの Victoria & Albert Museum での展示作品で、砂糖のレリーフ状のオブジェで構成されている。オブジェの表面は大理石のように白く滑らかである。レリーフのデザインには古代ギリシャ、ドイツのバロック、フランスのゴシック



図⑦ Tasha Marks | AVM Curiosities, 《Alabaster Ruins》2017. Image courtesy of the artist

ク、イギリスのチューダー様式などヨーロッパのさまざまな時代の歴史的建築様式を取り入れている。近世に至るまで砂糖は高価な嗜好品であり、砂糖の彫刻は地位や自己顕示、権力の代名詞となった。⁽¹³⁾この作品を作るためにマークスは17世紀の「シュガープレート」という伝統的なレシピを使用した。材料はアイシングシュガーにトラガントガム（食品添加物・増粘剤）を混ぜて練ったシュガーペーストのような素材で可塑性があり、乾燥すると石のように硬くなる。一方で、造形にはデジタル技術を駆使し、Victoria & Albert Museum のコレクションを3D スキャン（Photogrammetry 技術）で型取りし3D プリントで出力したレリーフ型を作り出した。歴史の深い洞察に裏付けされたマークスによる砂糖のレリーフは、博物館のギャラリーで古典的な大理石の彫刻作品と共に展示され、西洋文化の変遷と儂さ、そしてその移り変わりを懸命に保存しようとする博物館の存在と対比させている。マークスは大英博物館よりコミッションを受けたYouTube ビデオシリーズ「Pleasant Vices」の中で砂糖の歴史について詳しく言及し、砂糖彫刻のレシピと作り方を実演している。⁽¹⁴⁾

⑤ 羅懿君

台湾のアーティスト 羅懿君（ロー・イーチュン、1985- 以下羅と称する）はバナナの皮、タバコの葉、サトウキビなどの換金作物を用いて、農業と政治の関係とその歴史的な文脈を探究する作品を発表している。羅は2019年に台南市の芸術文化センター「總爺藝文中心」で開催された「麻豆糖業大地藝術季」(Madou Sugar Industry Art Triennial) に参加し、バガス（サトウキビの搾かす）を主な素材に使った立体作品《蔗渣、糖蜜、混合酒精，是什麼使今日的蔗園變得如此不同，如此有魅力？》(図8) を制作した。作品は竹で編んだ骨組みにバガスを貼り付けた構造になっており、この技法により旧日本軍の戦闘機「紫電改」をモデルにした戦闘機と鋏や鎌などの農機具を組み合わせたインスタレーションとなっている。新たな植民地を得た日本にとって台湾は資源の宝庫であり、とりわけ砂糖は日本の南進政策を支えた重要な資金源になった。⁽¹⁵⁾太平洋戦争末



図8 羅懿君，《蔗渣，糖蜜，混合酒精，是什麼使今日的蔗園變得如此不同，如此有魅力？》2019. Image courtesy of the artist

期、砂糖を精製する段階で出来る副産物の糖蜜は高純度のアルコールに合成され、米軍による南太平洋の油田封鎖により不足していた戦闘機の燃料として補われたという史実から羅は作品の着想を得た。⁽¹⁶⁾展示場所である「總爺藝文中心」は日本統治時代には明治製糖の本社があった場所でもある。⁽¹⁷⁾サトウキビ、農機具、旧日本軍の戦闘機というモチーフを使い、羅はサトウキビの商品的価値、時代の流れの中での変容、戦闘機を製造するために費やされた多額な費用と労力、そして戦争による破壊と虚無というアイロニーの物語を示唆している。砂糖と植民地支配というキーワードをたぐっていくとコンテンポラリーアートの世界では①～③の作品のように黒人奴隷の問題を扱ったものが圧倒的に多い中、羅の作品は西洋中心のアートの文脈においては比較的注目される機会の少ない日本による植民地統治に由来したさまざまな問題を想起させる。

⑥ アンドレア・ジャンデルノア

アメリカ・インディアナポリスを拠点に活動するアンドレア・ジャンデルノア (Andrea Jandernoa, 1989- 以下、ジャンデルノアと称する) は砂糖を使った流動感のあるインスタレーションを制作している。ジャンデルノアの作品は繊細で即興的だが、作品の材料として砂糖を使うようになったのは、自身が糖尿病を患っているという極めて個人的な理由に起因している。糖尿病については、病理学的な定義は確立されていても、患者として実際に病に向きあいつながら生きていくには不安が付きまとう。作品《Unsettled》(2018年) (図9) と《Pulled》(2019年) (図10) は中国伝統菓子の「龍のひげ飴」に似た「シュガープリング」の技術を使い、溶かした飴に粉を振りかけながら引き伸ばしては折りたたみ、飴が非常に細い線状になるまで何回も繰り返して作った作品である。《Unsettled》では、引き伸ばした白く繊細な飴の束は壁に設置された金属の細いリングに掛けられて展示してあり、その様子は滝を流れ落ちる水や、ミステリアスなもやを想起させる。また、ジャンデルノアは慢性疾患を持つ人々のコミュニティのためにワークショップを開催し、「シュガープリング」の技術を使った飴作りを患者と一緒に



図9 Andrea Jandernoa, 《Unsettled》2018. sugar and rings, 6×3 ft. Image courtesy of the artist



図10 Andrea Jandernoa, 《Pulled》2019, video, 8:00 min. Image courtesy of the artist

に行っている。砂糖が大量に生産・消費されるようになった現代社会において、糖尿病は最も代表的な慢性疾患のひとつである。ジャンデルノアにとって砂糖は単なる作品制作の材料だけでなく、自らのアイデンティティと重なるモチーフであり、同様の疾患を持つ人たちの心を癒やす芸術療法的な手段でもある。ジャンデルノアは病気の当事者としての独特な視点から芸術活動を行っているといえる。

世界中ではいろいろなアーティストが砂糖を用いたコンテンポラリーアート作品を発表している。本章で言及した作品はほんのごく一部に過ぎないが、本論では特に砂糖の持つ歴史・文化背景についての考察を通じ、明確なメッセージを表現している作品を取り上げた。砂糖自体は腐ることなく長期的な保存が可能な物質だが、温度と湿度の影響を受けやすいため砂糖を素材としたアート作品は一般的に「Ephemeral Art（一時的な芸術）」の 카테고リーに属し、作品を保存することは総じて困難である。したがって美術館に収蔵されたり、ギャラリーを通じて商業アートとして売り買いするにはハードルが高く、ヴィック・ムニーズの《Sugar Children》のように完成作品を保存が可能な媒体として発表しているものを除き、多くの作品は一度限りの展示のために制作され、展示期間を終えると姿を消す。しかし作品自体の寿命が短くても、そのメッセージは鑑賞者の心の中で生き続け、現代社会に存在する問題について考えるきっかけになり得る。また、カラ・ウォーカーの《A Subtlety》のように作品を疑似体験できるアーカイブがオンライン上に保存される例もあり、「Ephemeral Art」を何らかの形で後世に伝える手段については今後新しい選択肢が増えていくことが予想される。それゆえに本章で紹介した①～⑥の作品のように、砂糖をテーマにしたコンテンポラリーアート作品を通じて今日の社会において普遍的な問題を提起することは価値のある試みであり、たとえ作品のコレクション化や商業的な成功は難しいとしても、コンテンポラリーアートシーンではこれらのような作品も重要な役割を果たしていると筆者は考える。

2. 2000年以降の台湾におけるクリエイティブな製糖工場および関連施設の再活用法

2.1 台湾における糖業史概要

サトウキビはインド・中国を經由して台湾に伝わったと考えられている。中国の航海家・汪大淵（1311-没年不詳）が1349年に発表した著書『島夷志略』に台湾でのサトウキビについて記述があるため、少なくともそれ以前から栽培が行われていたと思われる⁽¹⁸⁾。しかし砂糖生産が盛んに行われるようになったのはオランダ統治時代（1624-1662年）以降であった⁽¹⁹⁾。当時の砂糖生産の主な労働力は中国大陆から移住してきた漢人が担っていた。この時期の砂糖の製造はまだ古典的な方法で行われており、糖廍（タンブー）（図11）と呼ばれる円錐形の建物の中で石臼と水牛の動力を使ってサトウキビを粉碎していた⁽²⁰⁾。このような伝統的な製糖法は清時代（1616-1912）まで続き、近代的な設備を使った大規模な砂糖の生産が始まるのは日本統治時代（1895-1945）になってからである。



図11 国立台湾歴史博物館（台南市）に展示されている「糖廍」の模型（写真左側、茅葺の建造物）

1895年、日清戦争の結果により台湾は清国から日本の植民地統治下に入った。その後、第二次世界大戦終結まで続いた日本統治時代において、これまで国内での砂糖消費をほぼ輸入でまかっていた日本は、台湾での大規模な砂糖生産にのりだすことで世界市場を手に入れるという思惑があった⁽²¹⁾。1900年代に入ると日本政府は国策として製糖業を全面的に支援し、台湾各地に大規模な製糖工場（糖廠）（図12）を建設する。これにより砂糖の生産量が飛躍的に増加、全盛期に砂糖工場の数は40カ所以上にも上り、砂糖は台湾における主要産業のひとつとなった（図13）。

台湾はオランダ、日本などの植民地支配を経験してきたが、歴史上サトウキビの生産において外国から連れてこられた奴隷による労働がほぼみられなかったというのは、新大陸の植民地での黒人奴隷が主軸となった砂糖生産体制と比較して特異な点



図12 日本統治時代の橋工頭（橋頭）糖廠と砂糖を効率よく運搬するために建設された軽便鉄道 由 未知—<http://www.taipics.com/sugar.php>、公有領域、<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=53235655>。

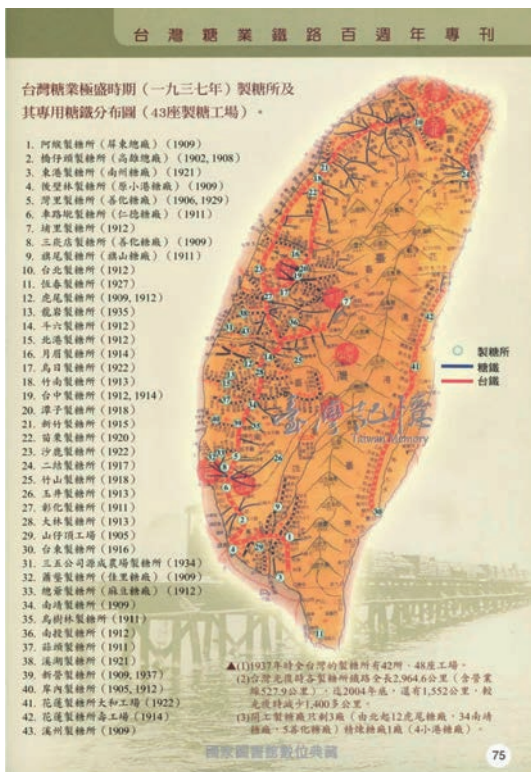


図13 日本統治時代の台湾における製糖最盛期（1939年）の工場分布図 國家圖書館臺灣記憶系統、「臺灣糖業鐵路百週年專刊」2007。〈<https://tm.ncl.edu.tw/>〉。(2023-06-17)（資料來源：國家圖書館臺灣記憶 <https://tm.ncl.edu.tw/>）

である。⁽²²⁾しかし、植民地支配はどの国の主導の下においても必ず搾取と軋轢を生み出す。日本の植民地下においては、サトウキビの買い付け価格を日本の製糖会社が一方的に決定したり、栽培農地の獲得に総督府が強権的な介入をしたりと台湾人に対し不公平で差別的なことが多数あったため、「二林事件」に代表される農民の抗議と衝突がいろいろな所で起こった。第二次世界大戦後、日本は戦争に負けて台湾から撤退した。中華民国政府は台湾国内の製糖会社を接收し、1946年に台湾糖業公司を設立した。⁽²⁴⁾1950-60年代まで台湾の砂糖産業は輸出を通じて

大きな外貨をもたらしたが、その後の世界的な価格の低迷と生産コストの上昇をうけて砂糖の生産は徐々に少なくなり、21世紀に入るまでにはほとんどの製糖工場が役目を終えた。⁽²⁵⁾2000年代初頭からは、使われなくなった製糖工場や糖業関連施設を改修して、芸術文化施設として再利用する動きが多く出てきた。

ここでは芸術文化施設として生まれ変わった元製糖工場とその関連施設に焦点を当て、これらの場所が現在台湾での文化発展にどのような影響を与えているかに言及する。

2.2 芸術文化施設として再活用されている製糖工場の例

① 駁二藝術特區（高雄市）

台湾で糖業が盛んになった日本統治時代、高雄港は砂糖を輸出する重要な拠点であった。当初、港から積み出される大量の砂糖は屋外に置かれていたため、風雨に晒されて品質が劣化するという深刻な問題がおこった。こうした問題に対処するため1912年から砂糖備蓄倉庫の本格的な建設が始まった。この倉庫群が現在の駁二藝術特區（図14）の前身である。



図14 駁二藝術特區の倉庫群から高雄85大樓（右側奥の高いビル）をのぞむ（2017年）

砂糖倉庫のある鹽埕区は、1928年に高雄市役所が移転したことにより開発が急速に進み、高雄で最も初期に発展したエリアとなった。国民政府の統治下もしばらくは台湾糖業会社が倉庫の一部を引き継いで砂糖の輸出を行っていた。ところが1970年代より国際的な砂糖の取引価格が急落すると台湾の砂糖産業は存続の危機に陥り、物流の中心地だった倉庫群も衰退していった。⁽²⁷⁾1990年代後半からは台湾各地で古い工場、宿舍、歴史建築など休眠スペースを活用するプロジェクトが活発に行われるようになった。⁽²⁸⁾この流れを受け、2000年に国慶節（10月10日）の花火大会が倉庫群のある新光埠頭で開催された事をきっかけに、芸術文化関係者や地域の名士たちは駁二倉庫をアートスペースおよび街づくりの拠点として活用するポテンシャルを見出した。⁽²⁹⁾2001年には「駁二藝術發展協會」が発足し、駁二藝術特區の運営を開始した。その後運営の母体は

「樹徳科技大學」(2004-2005年)を経て、2006年からは高雄市政府文化局の管轄するプロジェクトとなった。高雄市が直接経営に乗り出してから駁二藝術特區はさらに規模が大きくなり、年間を通じて多様な展覧会やイベントを開催している。また2015年からはアーティスト・イン・レジデンス(Artist-in-Residence, 以下AiRと称する)事業がスタートした。国内外のアーティストが倉庫内のアトリエ兼居住スペースに最大3カ月間滞在して芸術制作と発表を行うというプロジェクトである。近年では高雄港エリアの大規模な再開発事業とライトレール(軽軌)の開通にともない駁二藝術特區の倉庫にはバラエティに富んだショップやレストラン、エンタメ施設などが次々と開業し、商業施設としても大きく発展している。

②橋仔頭糖廠藝術村(高雄市)

橋仔頭(橋頭)糖廠(図15)は1901年に建設され、台湾で初めての近代化設備を備えた製糖工場であった。敷地内には工場の他に広大な倉庫群や、オランダのコロニアルスタイルを模倣した西洋建築の事務所、かつて工場長、副工場長の宿舍として使われていた日本家屋など特徴的な建物が今も残っている。1999年に工場が操業を停止した後、2001年ごろから橋仔頭糖廠藝術村が発足し、敷地・建物の文化施設としての再活用を始めた。



図15 橋頭糖廠 工場外観(2015年)

橋仔頭糖廠藝術村は台湾の行政組織「中華民國行政院文化建設委員會」(2012年から文化部に改制)の補助を受けてスタートした7つのAiR施設のうちのひとつであり、国内外からアーティストを招聘して滞在・制作場所と創作費用などを支援している。(図16、17)2008年には土地と建物を所有している台湾糖業公司から敷地内にある招待所を借りて芸術基地「白屋」を設立し、主に作品展示やイベントを行い、時には結婚披露宴会場としても活用している。AiR事業に加えて、芸術村は映画祭、建築ワークショップなどを継続的に開催し、クリエイティブな人材の交流を促進している。



図16 橋仔頭糖廠藝術村 AiRプログラム 成果展開幕式(2021年)撮影:橋仔頭糖廠藝術村



図17 AiRプログラム 成果展 黄志華の展示(2021年)撮影:橋仔頭糖廠藝術村

また2010年には台湾の土地や文化に独特の色合いを探求する「新台湾壁畫隊」が結成され、3.11東日本大震災被災地との芸術交流やイタリア・ベニスでのプロジェクトを行い、これまでに150人以上のアーティストが参加した。橋仔頭糖廠藝術村が他の文化芸術施設と比べて独特な点は、運営をアーティストとNGO(非政府組織)が共同で行っていることである。民間団体の運営なのでプログラムの企画において自由度と自主性が高く、文化資産や環境の保護に意識的に取り組んでいる。加えて近年では、以前にAiRプログラムに参加したアーティストを招いて白屋で展覧会を行い、作品の販売も積極的に行うことで持続的なアートコミュニティを築いている。

③新東糖廠文化園區(台東市)

新東糖廠文化園區(図18)は台東市中心部から海岸線を車で30分ほど北上した都蘭地区にある。前身は1933年に頼文騫(1886-1945)が設立した私設の製糖会社であり、主に紅糖(黒糖に近いがミネラルの少ない砂糖)⁽³⁰⁾の製造を行っていた。第二次世界大戦後は新竹出身の黄木水(1910-1986)が家族を連れ



図18 新東糖廠文化園區 外観 (2022年)



図19 拉黒子・達立夫のスタジオ (2022年)

て都蘭に移住し、会社を買収して製糖事業を引き継いだ。台湾にある砂糖工場は戦後ほとんどが台湾糖業会社の管理下に置かれたが、新東糖廠に関しては初期から現在に至るまで一貫して民間経営が続いている。1970年代後半に新東糖廠は最盛期を迎え、紅糖の生産量は台湾で第1位となった。その後台湾の糖業が衰退してからも新東糖廠は運営を続けていたが、1991年には正式に砂糖の生産を停止することになった。

そこからしばらくの休眠時代を経て、台湾の原住民アミ族出身の木彫作家 Siki Sufin (1966-) が大規模な作品を制作するため工場内の3号倉庫を借りたことをきっかけに芸術文化拠点としての活用が進んでいった。2002年には台東県政府が「新東糖廠文化園區」を設立し、倉庫スペースにはギャラリーや工芸品を販売するショップ、カフェなどのテナントが入居するようになった。多様な地域からクリエイターが移住し、コミュニティが形成されていった。2000年代後半以降は台東に来ていた外国人の旅客や移住者たちが都蘭に集まりだして国際色も豊かになり、園区内では定期的に音楽のライブコンサートも開催されるようになった。アミ族出身で国際的に活動しているアーティスト拉黒子・達立夫 (1962-) も倉庫内にスタジオを持っている (図19)。現在、新東糖廠文化園區の経営は主に倉庫空間を貸し出すことによって得られる家賃収入で成り立っており、今後倉庫を借りたいという問い合わせも多く、空き待ち状態となっている⁽³¹⁾。

④台東糖廠 (台東市)

台東糖廠 (図20) は台東市中心部の北西部に位置する旧砂糖工場跡地で、かつての台東と花蓮を結んだ鉄道「台東線」のルート上に位置する。この路線は現在、自転車道およびハイキングロード「台東山海鐵馬路」として再利用されており、この道をたどっていくと市中心部から比較的簡単にアクセスできる。



図20 台東糖廠 外観 (2019年)

工場の建物は1913年に建設され、日本統治時代には台東糖業株式会社と明治糖業株式会社が経営していたが、第二次世界大戦後は台湾糖業会社に接収され操業を続けていた。1996年に工場が停止した後、2004年に台湾糖業会社は工場を文化創意産業園区として再活用することを企画し、2006年には文化部の補助を受けて「東方製糖原創工廠」としてリニューアルオープンした。駐車場の一部分は野外ステージに、工場の倉庫はスタジオに改装され、現在は木工房、原住民の伝統工芸工房、染織工房、レストランなどのテナントが入居している。2014年にはフィンランドの建築家、マルコ・カサグランデ (Marco Casagrande, 1971- 以下、カサグランデと称する) が砂糖工場内の廃墟空間を利用したプロジェクト《Taitung Ruin Academy》を発表した。コンセプトは、彼の提唱する第三世代都市 (=工業都市に発生した有機的な廃墟) の理念、台湾原住民族の自然に関する知識などに基づいており、台湾国内外の大学や地域のボランティアと共同で制作された。作品は工場内の蒸留タンクを中心にして2階層に展開しており、畳を敷いた多目的スペース、ブランコがあり、天井から自然光の入るラウンジ、たき火スペース、植物や野菜、ハーブが植えられた庭園などがあり、雨水を利用して植物に散水するシステムも考案された。



図21 台東糖廠 工場内部と風化した《Taitung Ruin Academy》の作品部分 (2019年)

プロジェクト完成後、製糖工場内部(図21)は数カ月の間一般に公開されたが、残念ながら作品は保存されていない。⁽³²⁾

⑤ 總爺藝文中心／蕭壩文化園區 (台南市)

總爺藝文中心(図22)と蕭壩文化園區(図23)は台南市に位置する文化施設である。蕭壩文化園區の前身は明治製糖株式会社が台湾で初めて設立した近代製糖工場で、1909年から操業を開始した。總爺藝文中心も同じく明治製糖の工場で、1912年に操業を開始。總爺は明治製糖の本社を併設していた。1958年には蕭壩糖廠と合併し麻豆總廠という名称になり、その後1974年の改制により麻豆糖廠と佳里糖廠となった。麻豆糖廠と佳里糖廠はそれぞれ1990年と1995年に停止し、製糖業は近くの善化糖廠に集約された。善化糖廠は現在でも毎年サトウキビの収穫時期にあたる冬季限定で操業している。2000年代に入ってから台南市政府はこの二つの製糖工場の敷地と建物の修



図22 總爺藝文中心「紅樓」外観(2023年) 紅樓は日本統治時代には明治製糖の本社として使われていた建物で現在は芸術展やイベントの会場となっている。



図23 蕭壩文化園區 外観(2023年)

復とリノベーションを行い、芸術文化センターとして再オープンさせた。

總爺藝文中心と蕭壩文化園區はどちらも AiR 事業を行っており、視覚芸術、映像、パフォーマンスなど幅広いジャンルのアーティストを招いて創作活動を支援している。總爺藝文中心ではサイトスペシフィックな屋外作品を中心としたアートフェスティバル「大地芸術季」、特産の果物・文旦をテーマとした「柚花芸術節」など多様なアートフェスティバルを継続的に開催している。

蕭壩文化園區には2015年に蕭壩兒童美術館(子供美術館)(図24)がオープンし、現代的な切り紙の展示会や、ニューヨークのアーティストとの交流プロジェクトなど、特色のある展示を行っている。敷地のすぐ隣には古い建物を解体した時に出た木材、窓、扉、瓦などの建築資材を保存・リサイクルする



図24 蕭壩兒童美術館 企画展 Linda Toigo「探險去」(2023年)

「臺南市文資建材銀行」がある。こちらも台南市政府が運営する団体で、市内の古蹟の修復を行う団体や個人、アーティストの作品制作の素材として建築資材を無償で提供している。

サトウキビの生育は気候的に熱帯が適しており、台湾では南部を中心に栽培が盛んになったため、必然的に製糖関連施設も南部に集中した。現在その多くは文化園区として一般市民に開放されている。砂糖工場や保管倉庫の建物は広々としていて、アートとの親和性が高い。中でも上記に挙げた施設はアートを地域の街づくりや観光のための特色として積極的に取り入れている。これらの施設ではもちろん砂糖をテーマにしたアート作品だけに限らず、幅広いジャンルの制作と発表を支援している。特に最近の台湾で顕著なのは、歴史建築や空き倉庫を活用したAiR事業にとりくむ芸術文化施設が増える傾向が見られることだ。筆者はこれらのAiRプログラムに応募して2015年・2021年に橋仔頭糖廠藝術村、2017年に駁二藝術特區、2023年に總爺藝文中心に滞在し創作活動を行った。各プログラムとも渡航費、作品制作費、生活費などの手厚い金銭的支援があり、2-3カ月の間集中して制作を行うことができ、その成果を発表する展覧会を開催する機会もある。しかしながら急速に増えているAiR事業の数に対して、今後これらのプログラムの継続的な運営が問題になってくる。

台湾におけるAiR事業にかかる経費は多くが中央政府または地方政府の補助金で成り立っているため、このようなプログラムが今後も長期間存続するためにはプログラムの実施を通じて芸術文化施設のある地域と住民に有益な要素を還元できることを証明できないと、予算が削減もしくは打ち切りになる可能性も考えられる。特にAiRにおいてはアーティストがその地域に独特な自然や文化から発想を得て、地域のコミュニティと交流しながら作品を制作するという制作過程が重要であるのだが、この過程の部分においては目に見えてわかりやすい評価をするのがむずかしい点が多く存在すると考える。可視化、デジタル化しにくい部分をどのように価値化するか、AiR事業を運営する団体と、参加するアーティスト両者にとっての挑戦である。

高雄市の駁二藝術特區（以下、駁二と称する）については、高雄港エリアの再開発ブームも相まって順調に発展を遂げており、アートを主体とした街づくりとしては台湾で最も成功している例のひとつといえるだろう。特に、駁二以前はランドマークのような芸術文化施設が台湾北部と比べて少なかった高雄市にとって、駁二の発展は大きな観光資源となった。しかしながら再開発が進むにつれて、砂糖の倉庫群と周辺地域は商業化が進み、アートを展示する空間を凌駕している現状もある。アートと商業は対立することなくお互いに協調しながら発展し、双

方の調和がとれた街づくりを実施するのが理想だと筆者は考える。

3. 砂糖をテーマとしたアート制作の実践と実験

筆者は2015年より台湾に断続的に滞在し、かつて砂糖の生産中心国であり、現在も少量ながら砂糖の生産が続いている台湾の糖業史の変遷について学び、その経験を反映した美術作品を制作している。この章では二つの作品シリーズについて、その中でも特に2015年および2021-2022年にかけて高雄の橋仔頭糖廠藝術村での滞在制作中に学んだ製糖業の歴史にインスピレーションを受けた作品の制作プロセスとコンセプトをのべる。

3.1 砂糖を使った「あぶり出し」の技法を応用したプリント作品

「あぶり出し」は乾くと無色になるインクを利用して文字や絵を描き、加熱プロセスによる化学反応によって図柄を浮かび上がらせる技法である。日本においては、古くは秘密のメッセージを伝達する手段（ステガノグラフィ）として神社でのおみくじや酒席での遊びとして行われていたといわれている⁽³³⁾。近代では子供の遊びや理科の実験としても広く普及した。あぶり出しに使うインクはいろいろと種類があるが、ここでは砂糖を主成分とするインクを使ったあぶり出しについて言及する。

筆者は台湾・高雄市にある橋頭糖廠の廃墟の中を歩いて回り、建物の色あせたたたずまいから「あぶり出し」を試してみようことを思いついた。なぜなら砂糖のインクは加熱すると砂糖がカラメル化することによりセピア色に変色し、どこかつかしきを感じさせる質感を持った雰囲気になると思うからだ。この熱を加えてイメージを浮かび上がらせるプロセスはフィルム写真の現像にも似た手法である。最も基本的なあぶり出しは筆を使って手描きする手法が一般的だが、筆者はこの技術を応用し、主にシルクスクリーン印刷またはCNCプロッターを使った描画により作品を制作している。

作品《Rediscovering Nostalgia : Sugarcane Farmers》(2015年) (図5) はシルクスクリーン印刷を用いたあぶり出し版画である。作品のモチーフは橋仔頭糖廠の近くでサトウキビを栽培している農家の夫婦である。筆者が橋仔頭糖廠藝術村に滞在中にサトウキビ畑と、サトウキビからジュースを作る過程を見学させてもらった。そして彼らのポートレートを写真に撮った後、画像をシルクスクリーンに製版し、砂糖のインクで印刷した。インクの材料は粉糖と卵白粉、少量の水を混ぜて粘り気がある状態にする。印刷方法については一般のシルクスクリーンと同じであるが、インクが目詰まりを起こしやすいため印刷にはなるべく目の粗いメッシュを使用した。イメージを浮



図25 yukaotani, 《Rediscovering Nostalgia : Sugarcane Farmers》2015

かび上がらせるための熱源はオープン、ガスコンロ、アイロンなどいくつかのオプションがあるが、筆者は試行錯誤の後、イメージを均等に現像するにはオープンが最も適しているという結論に至った。

作品《Rediscovering Nostalgia : between past and present》(2020年)(図26)はCNCプロッターを使った描画によるあぶり出しドローイングである。この作品は1927年の台湾全土における台湾糖業鉄道の鉄道路線図を元にドローイングのデータを作成し、地図を8枚のセクションに分けてCNCプロッターにて出力している。台湾糖業鉄道は主にサトウキビおよび砂糖の生産と運搬のために設けられた軽便鉄道で、砂糖工場と輸出港を結ぶ鉄道路線が複雑に走っていた。かつて砂糖生産国としての黄金期を支えた台湾糖業鉄道は現在も一部の路線が残っているが、大部分は廃線になり姿を消した。加熱直後のあぶり出し表面は焦げた砂糖の甘くて香ばしい匂いを放つため、あぶり出しという技法を使ったドローイングとして再現することにより、人々の記憶からも遠ざかり忘れ去られている台湾糖業鉄道を砂糖の甘い香りとともにもう一度目に見える存在とすることが作品の狙いである。

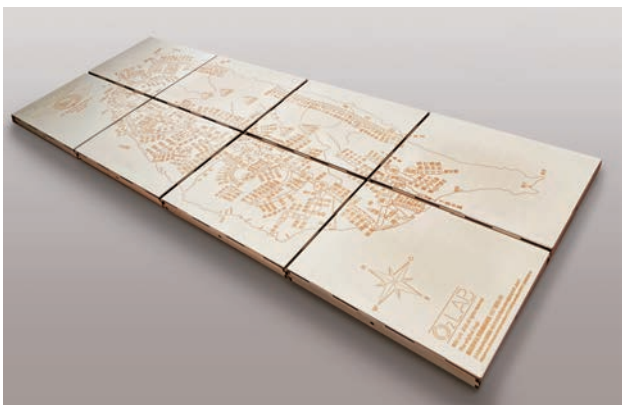


図26 yukaotani & hank ou, 《Rediscovering Nostalgia : between past and present》2020



図27 虎尾糖廠糖業文物館(雲林県)でのあぶり出しワークショップ(2022年)撮影:黄秀香



図28 虎尾糖廠糖業文物館(雲林県)でのあぶり出しワークショップ(2022年)撮影:黄秀香

あぶり出しの技法はテクノロジーの普及によりだんだんと廃れているものの、日本においては時折小学校の実験や自由研究の教材として紹介されることがあり、認知度が比較的高い。しかし台湾では一般的な技法ではなく、知っている人が非常に少ない状況である。筆者は台湾であぶり出しの認知度を高めるべく、芸術機関や学校などで子供から大人まで幅広い年代の人々を対象にしたワークショップを多数開催している。材料には台湾で身近に手に入るサトウキビジュースなどを使って、あぶり出しの原理と技法を紹介している。図27、28は台湾雲林県の「虎尾糖廠糖業文物館」で親子を対象としたワークショップを実施した時の風景写真である。

3.2 砂糖の結晶化を利用した立体作品

砂糖は結晶質(crystalline)と非結晶質(amorphous)のどちらにもなりうる性質を持っているが、ここでは砂糖が結晶化する仕組みを利用したアート作品について言及する。

砂糖は水によく溶ける性質を持っている。砂糖が水に溶ける量は水温と比例するため、水を加熱すると高濃度の飽和砂糖水



図29 yukaotani & hank ou, 《Sweet Tiara》2021.



図30 yukaotani, 《Crystalline Tea Bowl》2022.

ができる。そして飽和砂糖水は、冷却過程で結晶核となる構造体のまわりに砂糖の結晶を成長させることが可能である。技法については、3Dプリンターを使いメッシュ状の構造体として出力することによって細かい造形を可能にしているため、筆者は砂糖の結晶化を利用し、立体作品の制作を試みた。

作品《Sweet Tiara》(2021年)(図29)は砂糖の結晶を用いてティアラのような立体の制作を試みた。モチーフとなったのは橋頭糖廠の敷地内にある糖業博物館の展示物で、日本統治時代に作られたと思われる西洋式の古いキャビネットの装飾紋様を参考としてティアラの装飾模様に入れ込んだ。ティアラは橋仔頭の過去において、当時帝国主義的であった日本による植民地支配の象徴である。そして現在、旧砂糖工場の一部が結婚式の披露宴会場として活用され、披露宴では西洋風のドレスにティアラを着用した花嫁がしばしば登場するという二つの異なる時間軸を結びつける役割を表している。



図31 yukaotani, 《秋桜と茶筥》2022.

作品《Crystalline Tea Bowl》(図30)、《秋桜と茶筥》(図31)および《結界》(図32)は橋頭糖廠の工場長官邸として使用されていた日本家屋で2022年に開催された個展「甜蜜的黄金茶室：The Sweet Golden Tea Room」のために制作した一連の作品である。1940年に建てられた旧工場長官邸は高雄市の指定古蹟となった後に全面的な修復保全が行われており、台湾映画「血観音」(2017年)のロケ地になったことで有名になった。2020年からは本格的な日本茶を提供する茶館「吉照故里茶道院」がテナントとして入居している。この作品シリーズを制作するにあたり、筆者は橋頭糖廠の持つ歴史と日本茶道の美学に基づき、日本統治時代の台湾に生まれ育った架空の茶人



図32 yukaotani, 《結界》2022.

を主人公にした短い物語を作成し、抹茶茶碗、結界、茶筌、生け花という茶道において使用する要素を砂糖の結晶彫刻として表現した。

おわりに

植物から純度の高い白砂糖を精製することは錬金術に似ている。実際に工場で砂糖が製造される工程を見てみると、スプーン1杯の砂糖を作るのにもかなりの時間と大量の原材料が必要なことに驚かされる。そのような手間ひまをかけて作った砂糖の甘みに世界中の人々が夢中になったが、より多くの砂糖を生産して富を手に入れようとする欲望と、砂糖を大量に消費したいという資本主義の強い欲求が世界経済を大きく突き動かしてきた。現代美術においては使用する素材自体が多分に意味合いを持ち、作品のメッセージとなる。たとえ作品に使う材料がありふれたものだったとしても、造形や表現方法を工夫することによって作品は強いメッセージを持ったアートに昇華することがあり、そのような意味ではアートもまた錬金術だといえる。アーティストが砂糖を作品のテーマとして扱う時、砂糖の持つ文化的、歴史的な意味合いは意識するしなにかかわらず内包されるが、アーティストがその文脈を深く研究して社会問題を提起する場合、作品はより洞察力に富んだものになりうる。

台湾での旧砂糖工場と関連施設を再活用した芸術文化施設については、20世紀初頭に建てられた日本統治時代の建築をベースとしており、過去の歴史の重みが表れている。例えば橋仔頭糖廠の工場事務所の建物の屋上には「銃眼」が多数設置されており、当時の利権者であった日本人経営者と台湾人民との間の対立と緊張感を物語っている。第二次世界大戦後も台湾糖業会社は植民地時代の建物を引き継いで砂糖の生産を行っていたため、工場の敷地内は関係者以外の立ち入りが禁止されており、長らく閉ざされた場所であった。過去に植民地主義のシンボルであった製糖工場が、現在広く一般に開放されるようになったのは皮肉なことに製糖業が衰退したための結果であるが、歴史の軌轢を刻んだこれらの建物が台湾の芸術文化発展という公益性をもたらす施設として生まれ変わり、人々が集まり交流する拠点として活用されているという事実は大いに有意義だといえる。そして古い建物の修復は多くの場合、新しく建て替えるよりも時間と費用が大幅にかかる作業だ。これらの文化遺産の保存と再活用が実現している背景には、民間の研究者や芸術文化の仕事に関わるたくさんの人たちの働きかけと努力があったということを忘れてはならない。さらに、台湾の中央および地方政府、台湾糖業会社などの協力により、これらの芸術文化施設は訪れる人に台湾糖業の歴史を体験的に伝え、新しい文化を育んでいくという重要な役割を担っている。

筆者が砂糖を作品制作に用いるようになったのは偶然によるきっかけであるが、作品を作り続けていくにつれ、素材の性質自体に加えて、砂糖の持つ国際的影響力、特に歴史と経済への関わり合いを作品制作の下地として考えるようになった。台湾に拠点を置き制作活動を行うようになってからは、日本統治時代の建物やその遺構を各地で日常的に見かけることが増えた。台湾に住む日本人のひとりとしては、日本時代の古蹟が修復保存され、活用されているのは喜ばしいことである。その一方で過去の日本が行った帝国主義的な植民地政策に対しては複雑な思いを持つこともまたしかりだ。しかしながら、全世界情勢が再び不穏になっている21世紀現在、砂糖にまつわる激動の歴史を含めた過去に起こった史実に改めて率直に向き合うことは、今後の国際社会が流血の争いと犠牲をいかに防ぐかという問題について考える上でも重要である。

砂糖を素材とした芸術作品を制作し、旧砂糖工場と関連施設を再活用した芸術文化施設での滞在制作と展示発表を行う過程で現地のさまざまな芸術関係者、歴史研究者、製糖業関係者の方々と出会う機会があり、自身の研究と創作活動に役立つフィードバックを得られたのは大変幸運なことであった。本論での研究を通しての結論は、砂糖の持つ歴史・文化的な影響をアートという媒体を使ってメッセージ化することは社会的に意義を持ち得る行為であるということ、そして台湾における旧砂糖工場および関連施設が次世代の芸術文化発展を担う場所として活用されている例はアートが街づくりや地域振興に貢献するポテンシャルを見いだしているということである。

凡例

1. 台湾繁体字の固有名詞については原則として繁体字のまま表記した。
2. 出典表記のない図版については筆者の撮影による。
3. 「橋仔頭」は古い呼称で、現在は一般に「橋頭」と呼ばれているが「橋仔頭糖廠藝術村」に関しては固有名詞なのでそのまま表記した。

註

- (1) Williams, Eric, *Capitalism and Slavery*, The University of North Carolina Press, 1994 (Original work published in 1962), P 27.
- (2) 矢ヶ崎典隆「地理学で読み解く世界の砂糖生産地域」独立行政法人農畜産業振興機構、2019年、49頁、https://www.alic.go.jp/joho-s/joho07_002080.html (最終閲覧2023年6月10日)。
- (3) 川北稔『砂糖の世界史』(電子書籍版)岩波書店、2016年、12-18頁。
- (4) 同書、17頁。
- (5) 同書、179-181頁。
- (6) 副題の原題: *Homage to the unpaid and overworked Artisans who have refined our Sweet tastes from the cane fields to the Kitchens of the New World on the Occasion of the demolition of the Domino Sugar Refining Plant*
- (7) Art 21, Kara Walker: "A Subtlety, or the Marvelous Sugar Baby" (SHORT) 2014. <https://art21.org/watch/extended-play/kara-walker-a-subtlety-or-the-marvelous-sugar-babyshort/> (accessed June 3, 2023).

- (8) Creative Time, *Creative Time Presents Kara Walker's "A Subtlety"*, YouTube, 2017, Video, 6:30, <https://www.youtube.com/watch?v=W2sedoeOiB8> (accessed June 3, 2023).
- (9) Google Arts and Culture, <https://artsandculture.google.com/entity/kara-walker/m04zfjb> (accessed May 6, 2023).
- (10) The Metropolitan Museum of Art, *Vik Muniz | Valentina, the Fastest | the Metropolitan Museum of Art*, <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/281927> (accessed March 25, 2023).
- (11) MutualArt - Auctions, Exhibitions & Analysis for +651k artists, *Meschac Gaba: Sweetness | Exhibitions | Mutualart*. 2009, <https://www.mutualart.com/Exhibition/Meschac-Gaba-Sweetness/D956B6EAF95B44E7> (accessed June 2, 2023).
- (12) 川北、前掲書、19頁。
- (13) The British Museum, *The Story of Sugar in 5 Objects by Tasha Marks*, 2018, <https://www.britishmuseum.org/blog/story-sugar-5-objects> (accessed May 20, 2023).
- (14) The British Museum, *Pleasant Vices Episode 4 | Sugar*, 2018, YouTube, https://www.youtube.com/watch?v=qdkTm_S3CTU. (accessed May 20, 2023).
- (15) 竜口英幸「台湾に繁栄もたらした砂糖」集広舎、2021年、<https://shukousha.com/column/tatsuguchi2/10064/> (最終閲覧2023年5月21日)。
- (16) 羅懿君「黒・金・白」天美藝術基金會、2022年、88-93頁。
- (17) 總爺藝文中心「認識總爺：園區沿革」2023年、<https://tyart.tnc.gov.tw/index.php?inter=about&id=1>。(最終閲覧2023年6月2日)。總爺藝文中心については本論第2章(2.2)で詳しく記述している。
- (18) 臺灣糖業公司「臺灣糖業復興史」國家圖書館臺灣記憶系統、1958年、1頁、https://tm.ncl.edu.tw/article?u=007_102_000032。(資料來源：國家圖書館臺灣記憶 <https://tm.ncl.edu.tw/>) (最終閲覧2023年5月11日)。
- (19) 同資料、1-2頁、(最終閲覧2023年5月11日)。
- (20) 中研院歷史語言研究所 歷史文物陳列館「番社采風圖 糖廊」2023年、<https://museum.sinica.edu.tw/collection/19/item/293/> (最終閲覧2023年5月12日)。
- (21) 竜口、前掲注(15)。
- (22) 野林厚志、「台湾社会の甘い飲食文化 砂糖の歴史生態から考える」『国立民族学博物館研究報告』44, no. 2, 2019年、71頁。
- (23) 二林事件：1925年に台湾彰化県二林で勃発。サトウキビ農家が精糖工場に対し、サトウキビ買取価格の引き上げと取引の公平性を訴えて起こした農民運動である。臺灣新文化運動紀念館、「1925年10月22日 二林蔗農事件」2023年、https://tncmm.gov.taipei/Content_List.aspx?n=DA833F1B6E83FCFE。(最終閲覧2023年5月8日)。
- (24) 台湾糖業公司、「台湾糖業股份有限公司官網 企業簡介」2023年、<https://www.taisugar.com.tw/chinese/CP.aspx?n=10003&s=1810>。(最終閲覧2023年5月1日)。
- (25) 台湾糖業公司「封面故事 在地糖廠在地名？那可不一定？」【臺灣糖業42座製糖工場二戰前後名稱對照表】『台糖通訊』2023年5月号、<https://www.taisugar.com.tw/monthly/CPN.aspx?ms=1495&p=13389178&s=13389211>。(最終閲覧2023年5月12日)。
- (26) 蔡昀珊、莊淑姿「從港埠倉庫到藝術特區 駁二藝術特區之發展歷程。」『高雄文獻』5卷、no. 2期、2018年、132頁、<http://www.khm.org.tw/storage/files/1310/original/87690439825f641cc0624de.pdf>。(最終閲覧2023年5月8日)。
- (27) 同書、135頁。
- (28) 同書、136頁。
- (29) 駁二藝術特區「認識駁二 | 駁二藝術特區 Pier-2」2023年、<https://pier2.org/about/> (最終閲覧2023年5月8日)。
- (30) 文化部文化資產局 國家文化資產網「都蘭新東糖廠」2023年、<https://nchdb.boch.gov.tw/assets/overview/historicalBuilding/20021205000009> (最終閲覧2023年5月8日)。
- (31) 筆者が2022年8月に台東都蘭を訪れ、新東糖廠経営責任者の黄燦煌氏に行なったインタビューに基づく情報である。
- (32) 《Taitung Ruin Academy》の活動を記録したフェイスブックページ <https://www.facebook.com/RuinAcademy/> によると、プロジェクトは2014年8月1日から31日まで展示公開され、その後も2014年11月頃までは予約制で作品公開を行っていた模様である(ページの更新は2016年で休止)。
- (33) Parent, M. Neighbour, *Aburidashi*, JAANUS, <https://www.aisf.or.jp/~jaanus/deta/a/aburidashi.htm> (accessed May 25, 2023)。
- (34) 一般社団法人東大阪ツーリズム振興機構、「万葉集にも登場する古い【辻占】の総本山「瓢箪山稲荷神社」『ピカッと東大阪 東大阪公式観光情報サイト』2021年4月14日、<https://pikahiga.jp/column/tujiuranai/>。(最終閲覧2023年5月25日)。例えば東大阪市の瓢箪山稲荷神社では現在もあぶり出しを使った古典的なおみくじを販売しているが、あぶり出しの歴史的作品例は非常に稀であるため、研究資料も少ない。

助成

本論文は、下記の研究助成を受けて行った研究の成果をまとめたものである。
公益社団法人糖業協会「糖類に関する調査研究活動に対する助成事業」

謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただいた多くの方々々に心より感謝申し上げます。

(敬称略・順不同)

台湾糖業股份有限公司 高雄區處

台湾糖業股份有限公司 雲嘉區處

台湾糖業股份有限公司 台南區處

橋仔頭糖廠藝術村／白屋

總爺藝文中心

陳志鵬(橋頭文史協會)

王秀月(吉照故里茶道院)

唐麗芳(雲林故事館)

黃秀香(雲林故事館)

黃燦煌(都蘭新東糖廠)

蔡孟娟

拉黑子・達立夫

黃志華

羅懿君

Tasha Marks | AVM Curiosities

Andrea Jandernoa

Naomi Kaly

黃至正

劉峻豪

竹内道

歐韻豪(hank ou)